

課題レポート(第3回)は、
前にある**緑のカゴ**に提出して下さい。

本日のワークショップで使用する
プリント3枚が前テーブルにあります
ので、各自、1枚ずつ取って下さい。
(3枚のうち、1枚は白紙です。)

職業に関する課題レポート(第4回)

職業人として「働くことの意義」を示す内容を、本、映画、TVドラマ、歌詞、コミック等から抽出して解説せよ。

レポート提出期限:

6月17日(水) 11:50まで。

ワークショップ： 感覚で完成させよう「進む道 見つけまシート」

(NHK教育TVの「テストの花道」(2013年6月24日(月)放送)の「進む道が見える！」をベースに内容を構成しています。)

いざ、進学や就職の時期になっても、将来目指す道や目標がわからないと、なかなか積極的に取り組むことができないものです。そこで「やりたいことを見つける」ヒントを紹介します。

まず、手元のA4サイズの紙を
16等分に折って、その大きさに切って下
さい。

（4回折れば、16等分できます。）

将来やりたいことはありますか？

とある高校の1年生たちに聞いたところ、半数以上が、「将来やりたいことが、ハッキリしていない」との答え。将来のことがイメージできず、お手上げの様子。自分の将来を考えられないというのは、いわば、真っ白なページに今の自分しかいない状態。

目標を設定すれば、道が見えてくる。高校生のキミのやる気を発揮できるよ！

進路選択を研究する専門家によると、やりたいことが見つからないということは、目標が定まらず、エネルギーをどこに向けていいか分からない状態だといいます。進学するにしても、就職するにしても、本人が積極的に取り組むかどうかで大いに結果は違ってきます。

「進む道」の見つけ方

3つのステップで、具体的な進む道を発見する方法を紹介します。

ステップ1 「やりたいことの芽を見つける」

「将来何をやりたいのか？」と聞かれて高校生のキミはすぐに答えを思いつくかな？ 答えようと思っても、自信をもって言える人はそう多くないのでは。

【4つのモノサシ】

そこで役立つのが、4つのモノサシ。『好き』『得意』『憧れ』『貢献』のモノサシを使って、自分がやりたいことの手がかりを見つけ出そう。

- ・ **好き**：自分の持ち物や部屋の中から、好きなものを探してみよう。

- ・ **得意**：誰かに褒められたことやこれまでに身につけてきたことから思い浮かべてみよう。

- ・ **憧れ**：「こんな人になりたい」、「尊敬できる」と感じた人を思い浮かべよう。

- ・ **貢献**：人のためや社会のために何をしたいか、どう役立ちたいか考えてみよう。

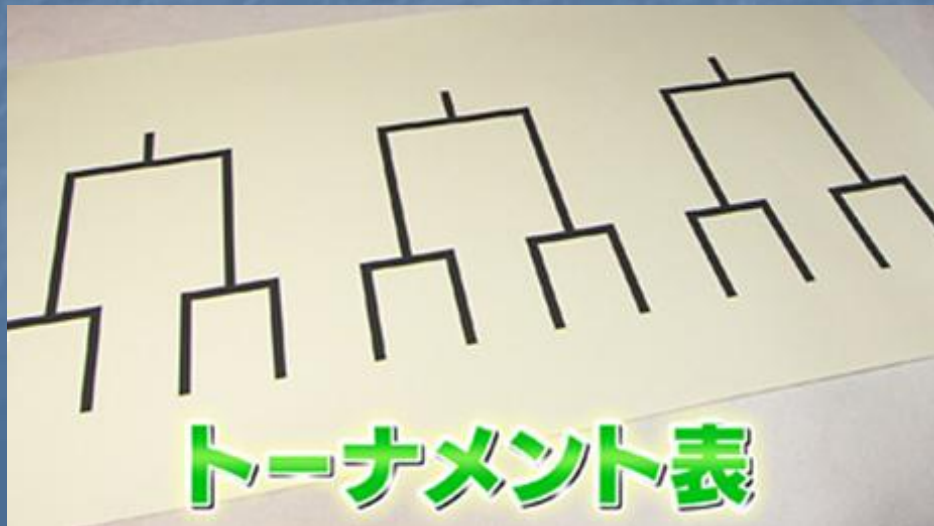
4つのモノサシ

「好き」「得意」「憧れ」「貢献」



【セルフトーナメント】

思い浮かんだワードをカードに書いていこう。
次にカードをトランプの要領できり、トーナメント表に配置。
1対1で対決させ、どちらが重要かを考えながら選んでいく。
「どちらが重要か？」は、自分なりに納得がいけば、選ぶ基準は何でもOK。自分の中で本当に大切な3つのキーワードが浮かび上がるまで対決を続けよう(対戦させるカードはいくつあっても構わない。数に応じてトーナメントを組み、絞り込むようにしよう)。



ステップ2 「やりたい仕事を見つける」

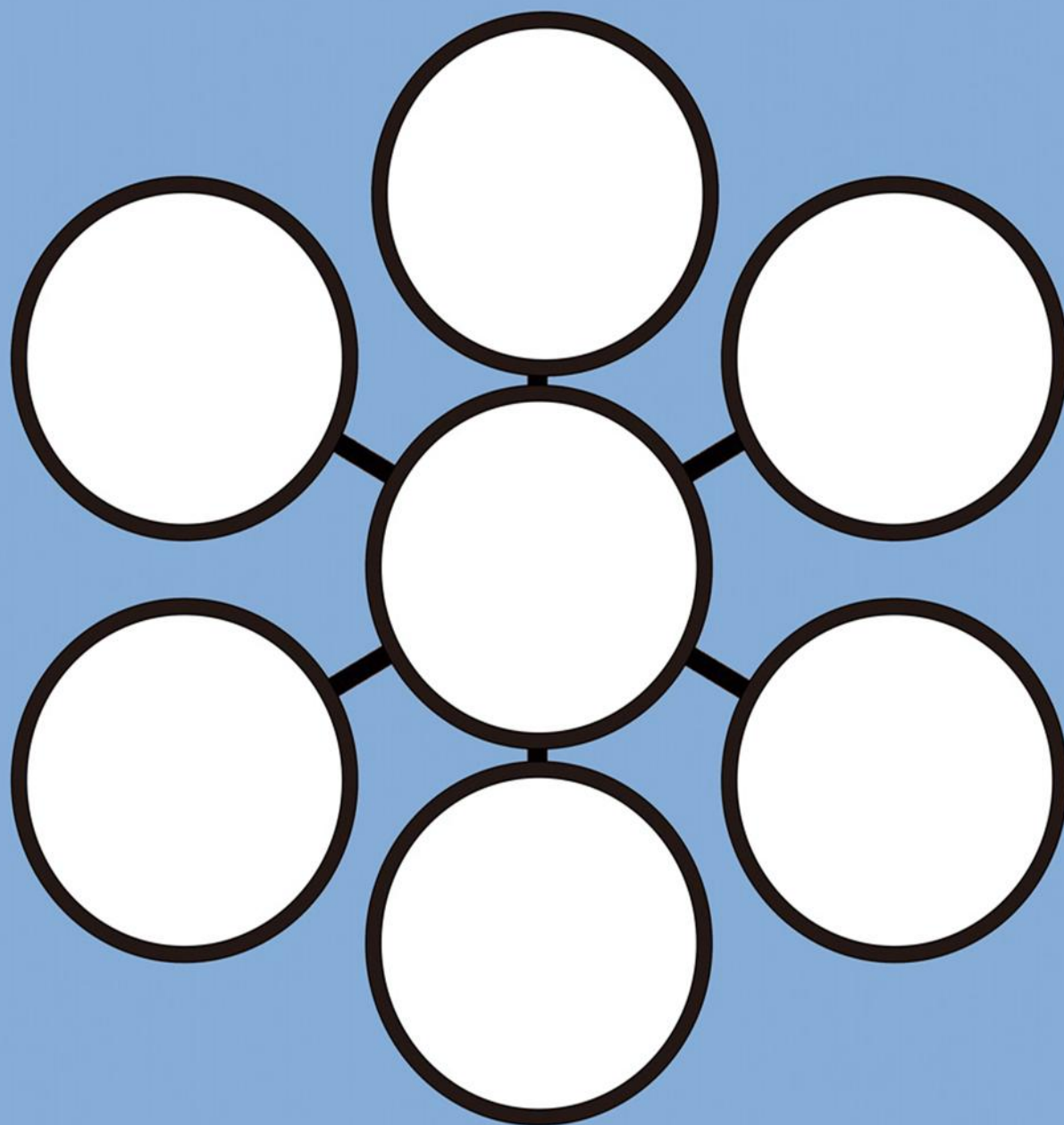
キーワードを絞ったら、いよいよ、仕事を見つけだしていく。

【イメージマップ】

発想を広げるツール「イメージマップ」を使用して、キーワードと仕事を結びつけていこう。

まず、真ん中の丸に先ほど選び出したキーワードを書く。次に、それに関連する仕事を周りに書き出していく。どんな仕事があるのか、本やネットなどで調べて思いつく限りあげてみよう。仕事を書き出せたら、やってみたいと思う優先順位をつけておく。

セルフトーナメントで勝ち残った他の2つのキーワードからもイメージマップをつくり、候補の幅を広げておこう。



イメージマップ

キーワードと仕事を結びつけていこう。



ステップ3 「今、進む道を見つける」

キーワードから浮かび上がった仕事につくには何をしていけばいいのか？ 今度は、つきたい仕事と現在の自分をつなぐ道を考えてみる。

自分の将来やりたいこと

--

なぜそれがしたいのか？

--	--	--	--

その就業でやりたいこと

--	--	--	--

そのために何が必要か？

--	--	--	--

実際に目指す目標

--



【進む道 見つけまシート】

1番上の枠は「自分が将来やりたいこと」。イメージマップで高い順位をつけた職業を書いてみよう。

その下の**オレンジの枠**には、「**なぜ、それがしたいのか？**」思いつく理由を書く。

この時、枠が全部うまらなくても大丈夫。ただし、書き込む理由が1つも出てこない場合は、その仕事は本当にやりたいことではないかもしれない。そんな時は別の候補で、やり直してみよう。

紫の枠には、**その職業に就いたら、やってみたいこと**を具体的にあげる。その仕事でどんなことを成し遂げたいのか、どんな風になりたいのかなど書いてみよう。

緑の枠には、上の紫の枠で書いたことに対して、「**そのためには何が必要か**」と問いかけ、思いつくことを書いてみる。色々調べて、必要となる能力や資格などを洗い出してみよう(わからなければ、学校の先生や家族の人にたずねてみよう)。書き出せたら、関連するものは上と下を線で結んで確認する。将来のためにどんなことを学び、何を身につけていくべきかが見えてくるよ。

最後の下枠には、上の緑の枠で書いたことから**自分はどこで何をすればいいのか**を書く。それこそが、高校生のキミが実際に目指す目標なのだ！

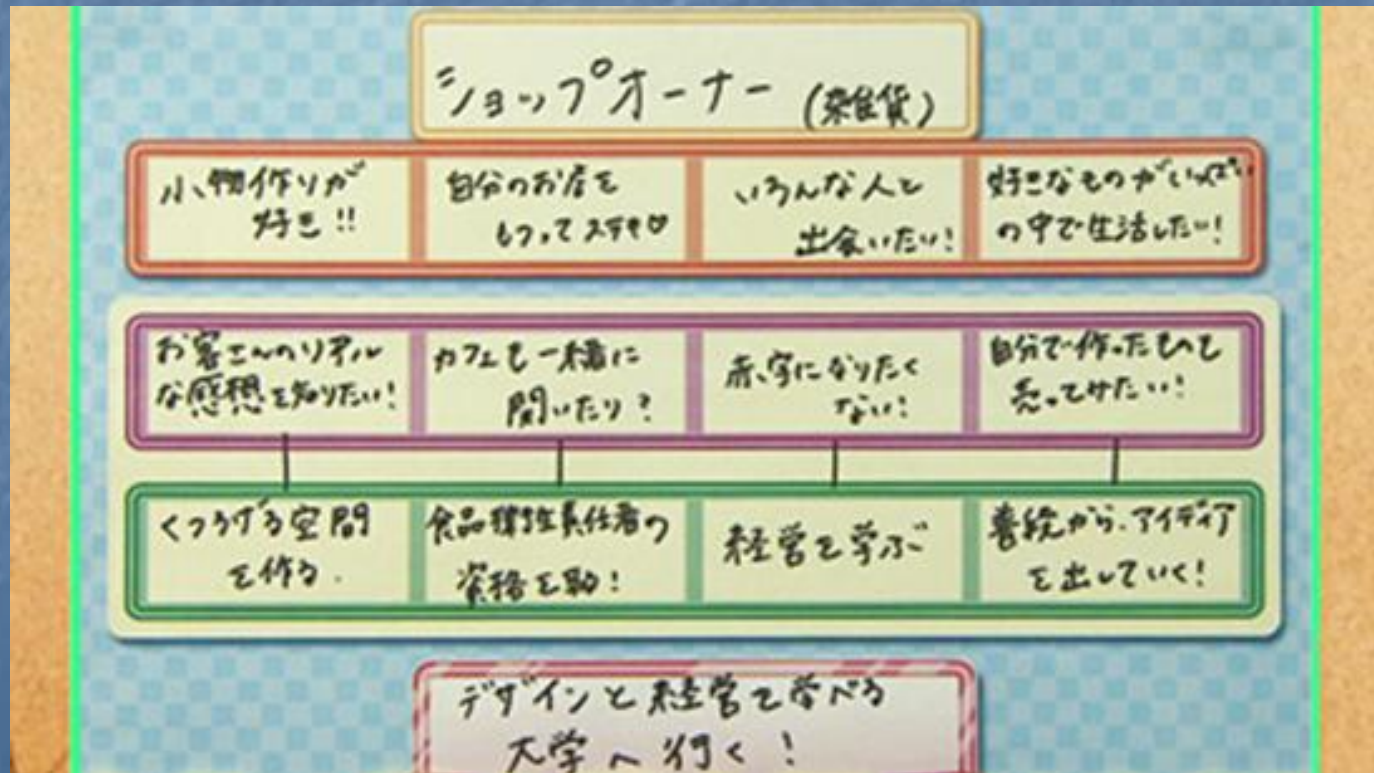
進む道 見つけまシート

オレンジ枠:なぜ、それがしたいのか？

紫枠:その職業に就いたら、やってみたいこと

緑枠:そのためには何が必要か？

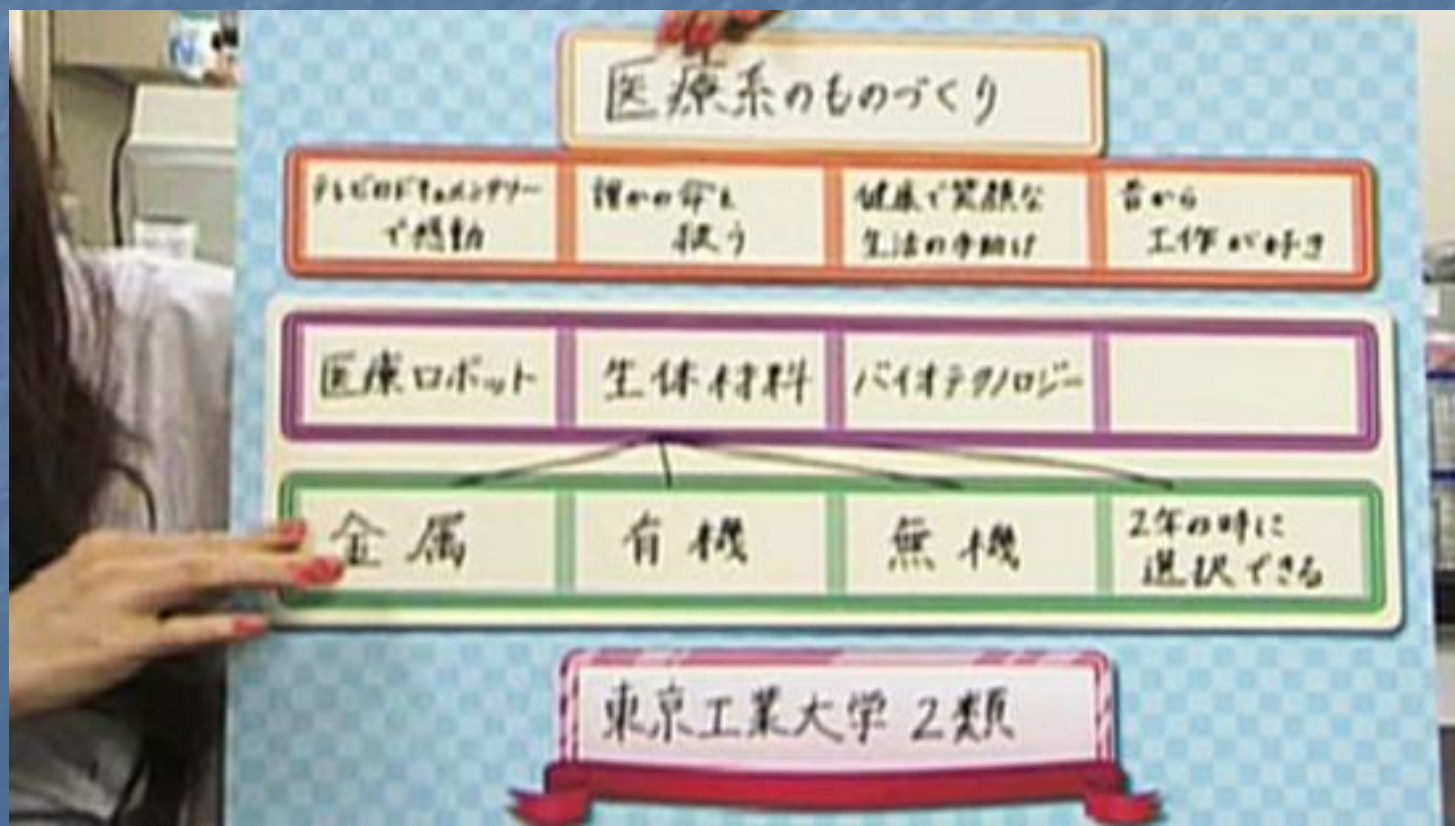
最後枠:自分はどこで何をすればいいのか？



<参考>「進む道」のを見つけ方(進学編)

『進む道 見つけまシート』は、自分が志望する進学先とやりたいことが合っているかどうかをチェックすることにも使えます。

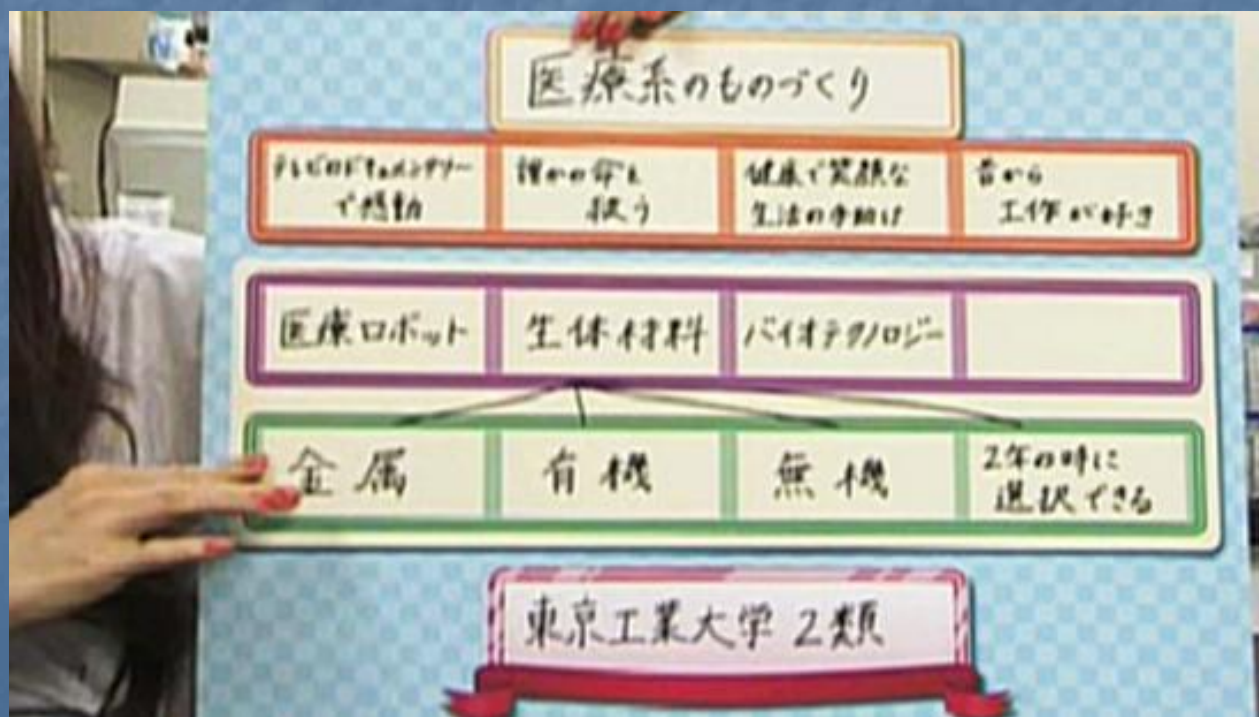
東京工業大学大学院で材料工学を研究する南さんに、志望校選びを振り返ってもらった。



まず、最初の職業欄から紫の枠までは、先ほどと同じように書き込む。南さんがやりたいと思ったのは、「医療系のものづくり」。きっかけは、テレビの「医療に関するドキュメンタリー」に感動したこと。昔から工作が好きのため、医師ではなくものづくりを目指した。

紫の「具体的にやりたい仕事」の欄には、3つ書き込んだ。

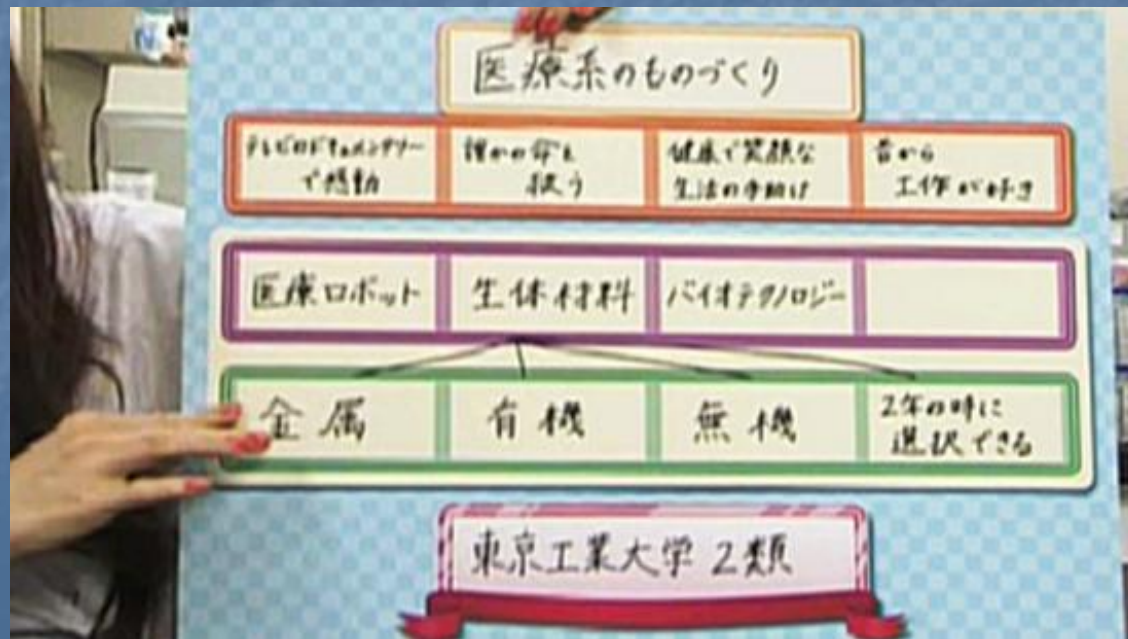
続く緑の枠だが、進学先チェック版では、ひとまず飛ばして、先に目標欄へ。志望する進学先の学科やコースなどを書きこむ。南さんの志望は、東京工業大学で材料系を研究する2類だった。



志望先を記入したら、**緑の枠**にそこで学べることや身に付けられることなど、特徴を書き出す。大学のホームページなどを活用しよう！

そして最後に、**紫の枠**で書き出した「将来やりたいこと」と**緑の枠**に書き出した「志望先で出来ること」が合っているか、線で結んで確認。結ばれていれば、将来やりたいこととつながっているということ。南さんの場合は、人工臓器や人工骨などを扱う生体材料の仕事に合っていることがわかった。

進学先で学べることと将来やりたいことのマッチング。自分が志望する進学先とやりたいことが合ってるかどうかをチェックするときにも試してください。



B. 職業選択の発達的特長

キンズバーグ(1951)は、職業選択の発達的特長を次の3つに要約している。

- (1) 職業選択は、青年期の全期間を通して行われる。
- (2) 職業選択の過程は、連続的なもので、基本的には後戻りできない。
- (3) 職業選択は、個人的要因(興味・能力・価値観)と現実的要因(雇用機会)との妥協で終結する。

その後、キンズバーグ(1972)は、この理論への批判を受けて、次のように部分的修正を行っている。

- (1)職業選択は、生涯を通して行われる。
- (2)職業選択の過程は、後戻り可能であるが、時間や経費などの損失を受ける。
- (3)職業の選択・決定は、個人的要因と現実的要因との最適化の過程である。
(ネガティブなイメージがある「妥協」という用語から、ポジティブなイメージをもつ「最適化」という用語に改称している。)

表2-2 キャリア発達に関する諸理論の分類

カテゴリー	理 論 名	主 な 特 徴	主 な 該 当 者
内容理論 (content theory)	特性一因子理論 (trait & factor)	個人の能力や興味などの特性と職業側の要請する要因とが適合すれば、職業選択や適応の問題は解決する。	パーソンズ, F. ウィリアムソン, E.G. マイヤーズ, G.E. デイビスとロフキスト
	人 格 理 論 (personality)	職業(進路)選択の原因を、主に、個人の人格的諸特徴(欲求・興味・性格など)と関係づけて説明している。	ロー, A. ブリル, A.A. ボーディン, E.S. ホランド, J.L.
	状 況 理 論 (situational)	職業(進路)選択には、個人をとりまく環境状況(社会的・経済的・偶然的要因など)が影響を与えている。	ブラウ, P.M. ミラーとフォーム リブセット, L. シーウェル, W.H.
過程理論 (process theory)	発 達 理 論 (developmental)	職業(進路)選択や適応をめぐる行動は、個人の継続的な過程であり、いくつかの発達段階を経過する。	ギンズバーグ, E. スーバー, D.E. ジョーダン, J.P. クライツ, J.O.
	意志決定理論 (decision-making)	職業(進路)選択を、個人の意志決定の連続的な過程としてとらえ、そのメカニズムを解明しようとしている。	ティードマン, D.V. ヒルトン, J.L. ジェラット, A.B. クルンボルツ, J.D.

2-3-2 スーパーの発達理論

A. 職業的発達理論

スーパー(1953)は、従来の心理学的・社会学的研究などを整理・検討し、その基本的要素から職業的発達理論の主軸となる10の命題を提唱した。

1957年には、研究の進展によって、「**職業的発達に関する12の命題**」に改訂している。

(1) 職業的発達とは、前進する、継続的な、一般には不可逆的な過程である。

(2) 職業的発達とは、秩序のある、1つの型をもった、予測できる過程である。

(3) 職業的発達とは、ダイナミックな(個人と環境との相互作用)過程である。

(4) 自己概念は、青年期以前に形成し始め、青年期にさらに明確となり、職業的な用語に置き換えられる。

(5) 現実的な要因(個人の特徴という現実と、社会という現実)は、青年前期から成人期へと年齢が進むのにもともなって、職業選択上ますます重要な役割を果たすようになる。

(6)親またはそれに代わる人との同一視は、適切な役割の発達や、一貫した調和のとれた人間関係の発達と関係があり、さらに、職業的計画やその結果の解釈にも関連をもつ。

(7)1つの職業水準から他の職業水準への垂直移動の方向と速度は、①知能、②親の社会経済的水準、③地位への欲求、④価値観、⑤興味、⑥人間関係の技術、⑦経済界における需要と供給の状態、と関連をもつ。

(8)個人が入る職業分野は、個人の、①興味、②価値観、③要求、④役割モデルとの同一視、⑤利用する地域社会の資源、⑥学歴の水準と質、⑦地域社会の職業構造と職業動向およびその態度、と関連をもつ。

(9)それぞれの職業は、能力、興味、性格特性について特徴のある型を要求するが、1つの職業でもいろいろな人が従事できるし、また、1人の人が異なる職業に従事できるなどの許容性（融通性）がある。

(10)仕事から受ける満足感や生活上の満足感は、個人が自己の能力、興味、価値観、性格特性に対するはけ口を、仕事のなかで見出す程度によって決まる。

(11)個人が仕事から得る満足度は、その人が自己概念をどれほど実現できたか（自己実現）の程度に比例している。

(12)仕事あるいは職業は、大部分の男子または多数の女子にとって、人格組織上の焦点となっている。ただし、ある人にとっては、この焦点が周縁的、偶然的であったり、あるいは全然なかったりして、社会的な活動や家庭などのような他の焦点が中心になっていることもある。

スーパーの発達理論の中核にあるのは、
自己概念 (self-concept) の発達であり、
職業的発達の過程を、

- ①自己概念を形成する
 - ②自己概念を職業上の用語に翻訳する
 - ③自己概念を実現する(自己実現)
- という3つの局面でとらえている。

B. 職業的発達段階と職業的発達課題

スーパーは、ビューラー(Buhler, C)や、ミラーとフォーム(Miller, D.C. & Form, W.H.)と、キンズバーグの先駆的研究を基礎にして、生涯にわたる職業的発達段階と、各段階の発達課題を概念化した。

スーパーは、その後、初期のものを改訂し、ジョーダン(Jordan, J.P., 1974)とともに、児童期から成人期に至るまでの職業的発達段階および職業的発達課題を新たに設定している。

表2-4 職業的発達段階と職業的発達課題

発達段階	時 期	職業的発達課題	説 明
A 成長段階	児童期 青年前期	自分がどういう人間であるかということを知る。 職業世界に対する積極的な態度を養い、また働くことの意味についての理解を深める。	1つの役割を果たすこと（しばしば尊敬する成人や友人に自分を同一化する結果として）により、また学校や自由時間、その他の活動によって、自分は何が得意か、何を好むか、他の人と自分はどんな点で違うかということを理解し、このような知識で自己像というものを形成する。
B 探索段階	青年前期	職業についての希望を結晶化していく。	自分に適切だと思う職業の水準や分野について、おおまかな予想を立てていく。
1 試みの時期	青年中期		
2 移行の時期	青年後期 成人前期	職業についての希望を特定化していく。	学校から職場へ、あるいは学校から高等教育機関に移行する。その際、おおまかな予想をある1つの選択へと絞っていく。

3 実践試 行の時期	成人前期	職業についての希 望を實踐してみる。	暫定的な職業について準備し、またそ れを試みることによって、それが生涯に わたる自分の職業となるかどうかを考え る。その職業経験はまだ準備的なもので その経験によって、積極的にその職業を 続けるか他の分野に進むかが考えられ る。もし他の分野を考えるようになれば、改めてその他の分野が何であるかと かその職業に対する方向づけを行なって いかなければならない。
C 確立段階 1 実践試 行の時期	成人前期 から30歳 頃まで	職業への方向づけ を確定し、その職業 に就く。	必要な機能や訓練経験を得て、一定の 職業に自分を方向づけ、確立した位置づ けを得る。今後起こる職業についての移 動は1つの職業内の地位、役割、あるい は雇用場所の変化が主になる。
2 昇進の 時期	30歳代か ら40歳代 中期	確立と昇進。	その後経験を積み、輩下を得、また能 力を高めることによって、その地位を確 かなものにし、また昇進する。
D 維持段階	40歳代中 期から退 職まで	達成した地位やそ の有利性を保持す る。	若年期は競争が激しく、新奇な発想が 豊富なのに比べて、この時期は、現状の 地位を保持していくことに、より力が注 がれる。
E 下降段階	65歳以上	諸活動の減退と退 職。	人びとは、やがてくるかまたは実際に 当面する退職にあたって、その後の活動 や楽しみを見出すことを考え実行してい く。

表 2-2 広井(1974)が提唱した進路発達段階と発達課題

年 齢	学 年	生徒・父母の考える		スーパ ーの発 達課題	発達課題（試案）		学 年																			
		発達段階	発 達 課 題		発達段階	発 達 課 題																				
	小4	(女)		(テーマ)	前 職 業 期	社会的 啓発期	・社会事象への関心や理 解を深める ・社会的な活動に広く参 加する	小4																		
10	5					自己開 発期	・探査的試行経験を豊か に持つ ・個性の自覚を高める ・個性への伸長・開発を 図る ・個性と進路との関係を 考え始める	5																		
11	6								中1																	
12	中1									2																
13	2										職業希 望の結 晶化 （目標が 次第に 固まっ てくる）	探索期	・進路・職業について学 ぶ ・自己理解をさらに深め る ・将来への展望を明確化 する ・暫定的に職業をきめ現 実吟味をくりかえす	3												
14	3														（前試 行期）	・暫定的な決定を学校・ 職場での経験を基に吟 味する ・職業観の確立を図る ・人生観の確立を図る ・方向を変えるならばこ の時期に考える ・キャリアについて考え 始める	高1									
15	高1	職業希 望の明 細化 （具体的 な職業 がきま ってくる）	職業的 発 達 期	・暫定的な決定を学校・ 職場での経験を基に吟 味する ・職業観の確立を図る ・人生観の確立を図る ・方向を変えるならばこ の時期に考える ・キャリアについて考え 始める	2																					
16	2					職業希 望の実 現 （実際に その職 業に定 着しよ うとし るしか しなお 探査的）	職業的 発 達 期	・その職業での定着を図 る ・将来の進歩への基礎を 固める ・経済的に独立する										中1								
17	3								職業希 望の明 細化 （具体的 な職業 がきま ってくる）										職業的 発 達 期	職業的 発 達 期	・その職業での定着を図 る ・将来の進歩への基礎を 固める ・経済的に独立する	2				
18	(大) (1)									職業希 望の明 細化 （具体的 な職業 がきま ってくる）													職業的 発 達 期	職業的 発 達 期	・その職業での定着を図 る ・将来の進歩への基礎を 固める ・経済的に独立する	(大) (1)
19	(2)										職業希 望の明 細化 （具体的 な職業 がきま ってくる）	職業的 発 達 期	職業的 発 達 期	・その職業での定着を図 る ・将来の進歩への基礎を 固める ・経済的に独立する												
20	(3)														職業希 望の明 細化 （具体的 な職業 がきま ってくる）	職業的 発 達 期	職業的 発 達 期									
21	(4)	職業希 望の明 細化 （具体的 な職業 がきま ってくる）	職業的 発 達 期	職業的 発 達 期	・その職業での定着を図 る ・将来の進歩への基礎を 固める ・経済的に独立する																					
22	(院) (1)					職業希 望の明 細化 （具体的 な職業 がきま ってくる）	職業的 発 達 期	職業的 発 達 期										・その職業での定着を図 る ・将来の進歩への基礎を 固める ・経済的に独立する								
23	(2)								職業希 望の明 細化 （具体的 な職業 がきま ってくる）										職業的 発 達 期	職業的 発 達 期	・その職業での定着を図 る ・将来の進歩への基礎を 固める ・経済的に独立する	(2)				
24	(3)									職業希 望の明 細化 （具体的 な職業 がきま ってくる）													職業的 発 達 期	職業的 発 達 期	・その職業での定着を図 る ・将来の進歩への基礎を 固める ・経済的に独立する	(3)
25											職業希 望の明 細化 （具体的 な職業 がきま ってくる）	職業的 発 達 期	職業的 発 達 期	・その職業での定着を図 る ・将来の進歩への基礎を 固める ・経済的に独立する												

(広井甫「中学校高等学校を通じての進路発達課題は何か」(1974)より引用)

C. 職業的成熟とその測定

スーパーとその同僚らは、職業的発達理論、および、職業的発達段階、職業的発達課題の妥当性を検証するため、1951年以来、20年間にわたる「**キャリアの類型的研究**」を行い、現在までに数多くの研究成果を発表している。

スーパーは、各段階の発達課題について、それがどの程度達成・成就されているかを示すために、**職業的成熟**の概念を用いた。キャリアの類型的研究において、その成熟の指針として、

①職業選択への方向づけ、②希望職業についての情報収集と計画性、③希望職業の一貫性、④諸特性の結晶化、⑤労働経験の独立性、⑥希望職業についての知恵、の6つをとりあげている。

その後、スーパーの研究協力者であった**クライツ**は、従来の職業的成熟の基準を整理して、
①選択要因、②独立、③自発性、④手段と目標の認識、⑤時間計画、⑥白昼夢と空想、⑦自己認識、⑧職業知識、⑨自己の適性と職務の要求や資格との関係づけ、の9つの変数をあげている。

クライツは、これらの変数を測定する目的で、職業発達目録を作成し、1973年には、これを**キャリア成熟目録**としてまとめた。1978年に彼は、**キャリア成熟の因子モデル**を提示している。

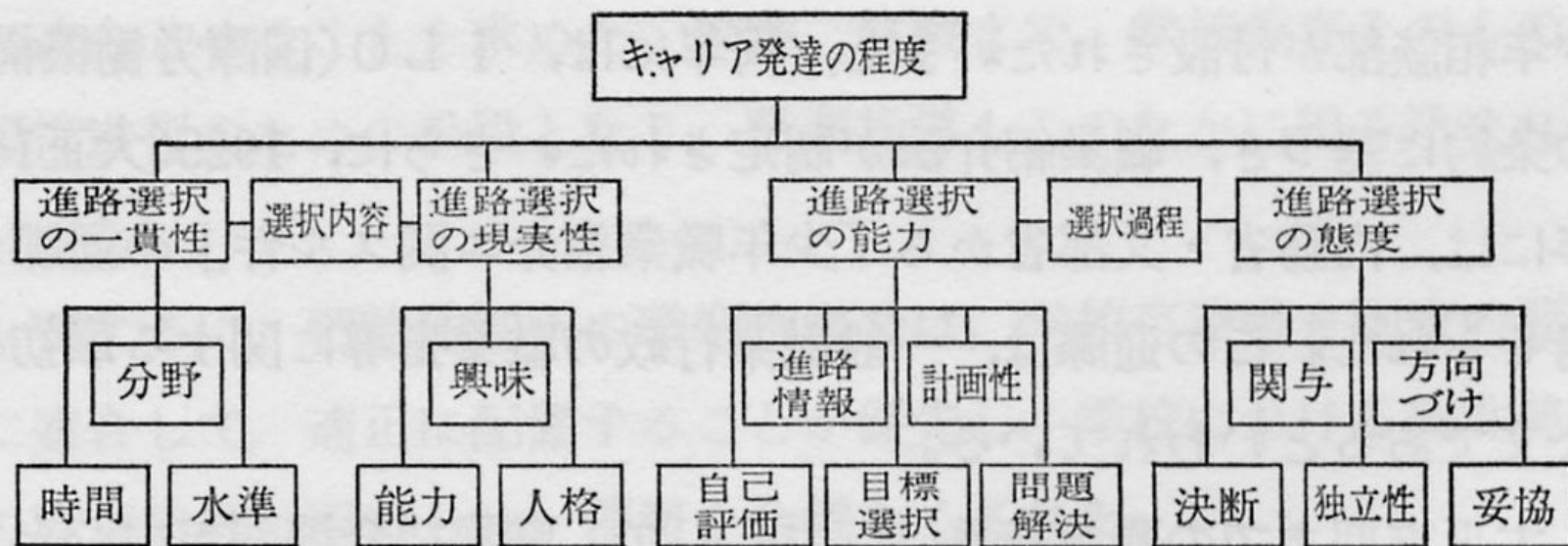


図2-5 クライツのキャリア成熟モデル